

67.柴梗半夏湯

参考文献名	柴胡	半夏	桔梗	杏仁	括呂仁	黄芩	大棗	枳実	青皮	甘草	生姜	乾生姜	用法・用量
漢方診療医典	4	4	2	2	2	2.5	2.5	1.5	1.5	1	2.5		*1
症候による漢方治療の実際	4	4	2	2	2	2.5	2.5	1.5	1.5	1	2.5		*2
改訂新版漢方処方集 注1	4	4	3	3	3	2.5	2.5	2	2	1.5		1.5	*3

*1生生姜

*2生生姜

*3乾生姜

注1

目標：発熱咳嗽、胸滿脇痛するもの

応用：(柴陷湯に同じ)肺炎、胆石症

処方番号：68

処方名：柴胡加竜骨牡蛎湯（さいこかりゅうこつぼれいとう）

処方構成：

柴胡 4-5、半夏 4、茯苓 2-3、桂枝 2-3、大棗 2-2.5、人参 2-2.5、竜骨 2-2.5、牡蛎 2-2.5、生姜 0.5-1、
大黃 1、黄芩 2.5、甘草 2 以内（大黃、黄芩、甘草のない場合も可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以上で、精神不安があつて、動悸、不眠、便秘などを伴う次の諸症

効能・効果：

高血圧の随伴症状（動悸、不安、不眠）、神経症、更年期神経症、小児夜なき、便秘

原典：傷寒論

出典：

解説：

出典である『傷寒論』には「傷寒、之を下し、胸滿煩驚し、小便利せず、譫語し、一身盡く重く、転側す可からず」と記されている。胸滿煩驚とは胸の中が詰まった感じで鬱陶しく、苦しみ悶えることである。また譫語とは精神錯乱し「うわごと」を発することである。

本方は小柴胡湯や大柴胡湯と類似の処方であり、胸脇苦満があり、少陽病期・実証の点で共通するが、精神症状が表立っているものが適応となる。『漢方概論』には神経症、更年期障害、血の道、小児の夜泣き、不眠症、神経性心悸亢進、動脈硬化症などに応用されると記されている。臨床上、参考となる記述である。

『EBM漢方』には高脂血症、抑鬱状態、神経症、不定愁訴、子宮収縮剤（塩酸リトドリン）による頻脈、それぞれに対する症例集積研究が記載されており、その有効性が示されている。

68.柴胡加竜骨牡蛎湯

参考文献名	柴胡	半夏	茯苓	桂枝	黄芩	大棗	生姜	人参	竜骨	牡蛎	大黃
処方分量集	5	4	3	3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1
診療の実際	5	4	3	3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1
診療医典	5	4	3	3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1
応用の実際	5	4	3	3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1*
明解処方	5	4	3	3	2.5	2.5	1	2.5	2.5	2.5	1

* 但し大黃は適宜に去加増減する。

〔注1〕 腹証では大柴胡湯または小柴胡湯に似て胸脇苦満があり、心下部膨満の感があり、腹部とくに臍上に動悸の亢進をみとめることが多い。症状としては神経過敏、興奮、動悸、息切れ、不眠などがあり、精神の錯乱などを起すこともある。

〔注2〕 (1)応用として、諸種の熱病、肺結核、胸膜炎、腹膜炎、神経症、血の道、不眠症、精神病、てんかん、高血圧症、発作性心搏亢進、脚気、心臓弁膜症、心不全、狭心症、心筋梗塞など(2)本方のもと外台秘要の処方であったといわれる。(3)尾台榕堂は類聚方広義で「この方は甘草、黄芩がぬけているようだ。宗版傷寒論には黄芩が入っているから、この柴胡加竜骨牡蛎湯は小柴胡湯の加味方である」としている。

処方番号：69

処方名：柴胡枳桔湯（さいこききつとう）

処方構成：

柴胡 4-5、半夏 4-5、生姜 1-3、黄芩 3、栝呂仁 3、桔梗 3、甘草 1-2、枳実 1.5-3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上のものの次の諸症

効能・効果：

咳嗽、喀痰

原典：傷寒蘊要

出典：勿誤薬室方函口訣

解説：

『勿誤薬室方函口訣』に「この方は結胸の類症にして、胸脇痛み、咳嗽短気、寒熱ある者を治す。この類に三方あり。胸中より心下に至るまで結痛する者を柴陷湯とす。胸中満して痛み、或いは肺癰を醸（かも）さんとする者をこの方とす。また両脇まで刺痛して咳嗽甚だしき者を柴梗半夏湯とす。世医は瓜呂枳実湯を概用すれども、この三方を弁別するに如くはなし。」と記載されている。肺の実熱証で咳嗽・喀痰の激しい者を目標にする。臨床では肺炎、気管支炎の急性期に用いる機会が多い。特にこの方は「肺癰を醸さんとする者」と述べられているように膿性の喀痰が多い咳嗽を目標にする。柴陷湯、柴梗半夏湯との鑑別は『勿誤薬室方函口訣』の記載通りである。細野方では、柴胡枳橘湯加五味として柴胡 3.5、黄芩 1.8、甘草 1、半夏 6、生姜 2、栝楼仁 2.4、枳実 1.8、桔梗 3.2、麦門冬 6.8、桑白皮 3.2、石膏 10、黄連 0.2、蘇子 1.5 のような処方を用いている。

69.柴胡枳桔湯

参考文献名	柴胡	半夏	生姜	乾生姜	乾姜	黄芩	栝呂仁	瓜呂仁	栝楼実	桔梗	甘草	枳実	用法・用量
臨床応用漢方処方解説 注1	5	5		1	3	1		3		3	1	1.5	
新版漢方医学<創元医学新書>	5	4	3			3	3			3	1	1.5	
経験漢方処方分量集	5	5			1	3			3	3	1	1.5	
改訂新版漢方処方集 注2	4	4				3		3		3	2	2	
漢方あれこれ 注3	5	5	3			3	3			3	1	1.5	
漢方処方大成 注4	5	5	3			3	3			3	1	1.5	
実用漢方処方集(経)	5	5	1			3			3	3	1	3	
実用漢方処方集(龍) 注5	4	4				3	3			3	2	2	

注1

小結胸、脈弦数、口苦、心下硬痛、或いは胸中硬満、或いは脇下硬満、或いは発熱、或いは日晡塩熱、或いは往来寒熱、耳聾、目眩するものを治す。(柴陷湯、柴胡半夏湯、瓜呂枳実湯と鑑別を要す)この方は肋膜炎、肺炎、肋間神経痛、胆石症、胆のう炎、すい臓炎などに応用される。

注2

脈弦数、口苦く心下硬痛、あるいは胸中硬満、あるいは脇下硬満、発熱、暮方に潮熱を發し、往来寒熱し、耳聾目眩、咳嗽短氣するもの 応用として肺炎、肋間神経痛、胆石症、胆のう炎

注3

ねばねばしたタンがたまり、せきこむと胸が痛み熱が出るときに使用する。肺炎を起こして抗生物質がもうつかえないとき、使用する。

注4

傷寒蘊要/経験・漢方処方分量集

注5

脈弦数、口苦く心下硬痛、胸中硬満、脇下硬満、発熱、暮方に潮熱を發し、往来寒熱し、耳聾目眩、咳嗽短氣するもの 応用として肺炎、肋間神経痛、胆石症、胆のう炎

処方番号：70

処方名：柴胡桂枝乾姜湯（さいこけいしかんきょうとう）

処方構成：

柴胡 5-6、桂枝 3、栝楼根 3-4、黄芩 3、牡蛎 3、乾姜 2、甘草 2

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、冷え症、貧血気味、神経過敏で、動悸、息切れがあるものの次の諸症

効能・効果：

更年期障害、血の道症、不眠症、神経症、動悸、息切れ、かぜの後期の症状、気管支炎

原典：傷寒論

出典：

解説：

小柴胡湯の人参半夏の代わりに瓜呂根と牡蛎が加わり、さらに桂枝と乾姜が加味され、大棗と生姜を去ったもので、頭汗、上半身の盗汗、口渴、弛張熱などの表証と軽い胸脇苦満や腹動が目標である。柴胡姜桂湯又は姜桂湯とも言われる。柴胡桂枝湯や柴胡加竜骨牡蛎湯に類似した方剤であるが、それよりさらに虚弱な体質のものに用いられる。 【「栝楼根」：『一般用漢方処方の手引き』では「瓜呂根」が記載されている。】

70.柴胡桂枝乾姜湯

参考文献名		柴胡	桂枝	黄芩	牡蛎	乾姜	甘草	瓜呂根	用法・用量
診察の実際	注1	6	3	3	3	2	2	3	*
診療医典		6	3	3	3	2	2	3	
処方解説	注2	6	3	3	3	2	2	3	
明解処方		6	3	3	3	2	2	3	
基礎と診療	注3	6~8	3	3	3	2	2	4	
漢方入門講座	注4	6	3	3	3	2	2	4	
漢方医学	注5	6	3	3	3	2	2	3	
治療の実際	注6	6	3	3	3	3	2	4	
100万人の漢方		-	-	-	-	-	-	-	

* 水500ccで煮て300ccとし、滓を去り、再び火にかけて200ccとし、3回に分け温服する。

〔注1〕 貧血症、心悸亢進、息切れ、白苔があり、往来寒熱、乾咳、多汗、盗汗があり、大便軟、利尿減少の傾向があり、舌は一定せず。

諸熱性病、肺炎、肺結核、胸膜炎、腹膜炎、マラリヤ、マラリヤ様疾患、神経痛、血の道、心悸亢進症、不眠、脚気等に應用。

〔注2〕 内外の陽氣が虚し、なお邪が残っていて乾燥をきたし、そのうえ氣の上衝があるものに用いる。胸脇満、微結、尿不利、渴、頭汗、往来寒熱、心煩、衝逆等の証を現わすもの。〔注1〕の応用のほかに、瘰癧、気管支炎、肺壞疽、癰疽、痔瘻、肝炎、黄疸、胆嚢炎、胃酸過多症、神経衰弱、更年期障害、ノイローゼ、蓄膿症、腎盂炎、頸筋のこり、中耳炎、耳下腺炎、どもり、頭瘡、紫斑病、産褥熱などに広く應用。本方は発汗して表が虚し、下したために裏が寒に陥ったものである。発汗と瀉下によって体内の水分が欠乏し、尿量が減じて渴してくる。表熱が残って裏の熱が上衝し、水分欠乏のため全身に発汗せず、ただ頭汗だけが出る。

〔注3〕 虚弱な体質の改善薬。柴胡桂枝湯よりなお虚弱な人で、食欲なくみぞおちから脇にかけて苦しく、あるいは痛み、のぼせ症で口舌が乾燥し、小便の出方が少なく、頭に汗をかいたり、寝汗が出たり、胸さわぎがしたり、腹部に動悸が打ったり、時に寒さと熱があり、神経症状をおこす人によい。更年期障害、血の道症、不眠症、神経症のほか感冒、胆嚢炎、胃酸過多症、胃潰瘍、蕁麻疹、喘息、るいれき、腹膜炎、急性腎炎、ネフローゼに應用。

〔注4〕 頭汗、渴、尿量減少あるいは弛張熱のあるもの。軽度の胸脇苦満、腹動があるもの、肺結核、急性熱病のやや日を経た場合、るいれき、胃酸過多症、急性気管支炎、肋膜炎、結核性腹膜炎、腎盂炎、慢性中耳炎に主効がある。

〔注5〕 柴胡加竜骨牡蛎湯より一段と虚証で、体力弱く、血色すぐれず、脈・腹に力なく、腹部の動悸が亢進し、心下部振水音があるもの。血の道症、神経症、感冒のこじれ、肺炎、肺結核、腹膜炎、心悸亢進に應用。

〔注6〕 ねぐるしい夢を多くみる、夢におびやかされるというような場合によい。肺結核には動悸、息切れ、咳嗽があり、咯痰に血がまじる程度のものに用いる。多量の咯血には用いない。ここに注意しなければならないのは、この処方の中の瓜呂根である。瓜呂根はキカラスウリの球根（塊根）であるが、往々にして、カラスウリ（土瓜根）を瓜呂根だといつわって売っているものがある。土瓜根はいやな苦みがあり、本方に入ると、悪心、嘔吐を催すことがある。

処方番号：71

処方名：柴胡桂枝湯（さいこけいしとう）

処方構成：

柴胡 5、半夏 4、桂枝 2-3、芍薬 2-3、黄芩 2、人参 2、大棗 2、甘草 1.5-2、
生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 2）

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度かやや虚弱で、多くは腹痛を伴い、微熱・寒気・頭痛・はきけなどのあるものの次の諸症

効能・効果：

胃腸炎、かぜの中期から後期の症状

原典：傷寒論、金匱要略

出典：

解説：

小柴胡湯と桂枝湯の合方であるから、小柴胡湯証で表証をかねるものを目標とする。小柴胡湯証（半表半裏＜内臓＞に熱があり、そのために口が苦く、食欲不振、胸脇苦満、悪心、嘔吐、心下支結などの症状）と桂枝湯証（頭痛、発熱、自汗、悪寒などの表証）がある場合に用いる。原方の量のままで合方するのではなく、共通の薬味は重複せず、各二分の一量ずつを合わせたもの、つまり小柴胡湯に桂枝、芍薬それぞれ定量の半量を加えたものである。

表熱症状（太陽証）頭痛、頭重、発熱、微悪寒、関節痛、脈浮を目標としては、感冒、流感、肺炎、肺結核、肋膜炎、頭痛、関節痛、肋間神経痛などの熱性疾患に、心下部の緊張症状を目標としては、胃痛、胃酸過多症、減酸症、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、急性虫垂炎、急性大腸炎、潰瘍性大腸炎、脾臓炎、胆石症、肝炎、黄疸、マラリヤ、肝機能障害、腎炎、腎盂炎など応用範囲の広い薬方である。本方はさらに神経症状を目標にして、ノイローゼ、神経衰弱、不眠、多怒、ヒステリー、血の道症、癲癩、脳症などの神経症にも応用される。

71.柴胡桂枝湯

参考文献名		柴胡	半夏	桂枝	芍薬	黄芩	人参	大棗	甘草	乾生姜	生姜	用法・用量
診療の実際	注1	5	4	2.5	2	2	2	2	1.5	-	2	
処方解説	注2	5	4	2.5	2.5	2	2	2	1.5	1		
明解処方	注3	5	4	2.5	2	2	2	2	1	1		
古方要方解説	注4											
基礎と診療	注5	4	4	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1	1		
漢方入門講座	注6	4	4	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1	-	1.5	
漢方医学	注7	5	4	2.5	2	2	2	2	1.5	-	2	
症候別治療		5	4	2	2	2	2	2	1.5	-	1	

【注1】 腹壁緊張して腹痛するもの。発熱を目標にするには、小柴胡湯証でまだ少し表証がのこっている感冒など。

【注2】 小柴胡湯証に表証をかねたものに用いる。また雑病として心下部を中心とし、心腹卒中痛(心下部がにわかに痛む)するものに用いる。太陽の邪と少陽の邪をかねたもので、表熱症状、心下部の緊張症状、神経症状を目標にして、感冒、流感、肺炎、肺結核、肋膜炎などの熱性疾患と、胃痛、胃酸過多症、減酸症、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、急性虫垂炎、急性大腸炎、潰瘍性大腸炎、膵臓炎、胆石症、肝炎、黄疸、マラリア、肝機能障害などの心下部緊張疼痛するものに用いられ、また肋間神経痛、頭痛、関節痛、腎炎、腎盂炎、ノイローゼ、神経衰弱、多怒、不眠、血の道症、ヒステリー、癲癇症、脳症などの神経症にも応用され、さらに盗汗、夜尿症、結膜炎、フリクテン、緑内障、皮膚癢痒症などにも転用される。

【注3】 心下部(胃)のつかえ、食欲不振、右直腹筋拘攣、頭痛を目標とし、手足関節痛、頸項強ばる、微熱、腹痛、嘔吐感、胸苦しい、汗かき体質のもの、感冒、流感、中耳炎、肺結核、肋膜炎、マラリア、胃酸過多症、胃潰瘍、胃痙攣、胆石症、胆のう炎、神経不安症、ヒステリー、皮膚癢痒症、てんかんを適応症とする。相見三郎博士は、てんかん、チック症、ノイローゼなど西洋医学でいう副腎皮質ホルモン適応症は本方の適するところであると発表している。

【注4】 太陽少陽の兼病なれどまた邪気沈滞して血熱を挟み了々たらざるもの。また支節煩疼と心下支結との太陽少陽二位の熱を交ふるに因る故に治の先後に従はずして双解の法を用う。

【注5】 虚弱な体質の改善薬。① 虚弱な体質の持主で、常に食欲なく、胸がつかえ、微熱があり、疲労しやすく、寝汗の出る人。② 腺病質で体格が悪く、胸囲がせまく、貧血していて、頸部のリンパ腺の腫れる人。③ 胃潰瘍、胃痙攣、胆石、肋間神経痛などの痛みに用いる。適応症—感冒その他の熱病、肺結核、肋膜炎、肺炎、胆石症、胆嚢炎、胃痛、胃酸過多症、便秘、関節炎、リウマチ。

【注6】 表熱があり、心下に血熱と水とがある。表熱は裏気をして上衝させようとする。心下の水とは支結というのが痰飲性のものであるから、本方は結胸の部に偏入されている。

【注7】 応用例：感冒、インフルエンザ、胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、気管支喘息、癲癇、夜尿症、胆嚢炎、胆石症、神経症、また相見三郎氏の発明によって、この方中の芍薬を増量(1日量5～6)して、ストレスによって発病する諸病に用いる。

処方番号：72

処方名：柴胡清肝湯（さいこせいかんとう）

処方構成：

柴胡 2、当帰 1.5、芍薬 1.5、川芎 1.5、地黄 1.5、黄連 1.5、黄芩 1.5、黄柏 1.5、山梔子 1.5、蓮翹 1.5、桔梗 1.5、牛蒡子 1.5、栝楼根 1.5、薄荷葉 1.5、甘草 1.5

用法・用量：

(1) 散：1回 2g 1日 3回

(2) 湯

しぼり：

体力中等度で、かんの強い傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

神経症、慢性扁桃炎、湿疹、虚弱児の体質改善

原典：外台秘要方

出典：一貫堂経験方

解説：

本方は四物湯（『和剂局方』）と黄連解毒湯（『万病回春』）の合方、すなわち温清飲に桔梗、薄荷葉、牛蒡子、栝楼根を加えたものである。

温清飲は古くなった熱をさまし、血を潤し、肝臓の働きをよくする方薬である。桔梗は頭目、咽喉、胸膈の滞熱を清くし、牛蒡子は肺を潤し、熱をさまし、咽喉を利し、皮膚発疹の毒を解す。栝楼根は津液を生じ、火を降し、燥を潤し、腫水を消し、膿を排除するものとある。

なお、『寿世保元』、『外科枢要』に同名異方の薬方もある。

72.柴胡清肝湯

参考文献名		当 帰	芍 薬	川 芎	地 黄	連 翹	桔 梗	牛 蒡 子	括 楼 根	薄 荷	甘 草	黄 連	黄 芩	黄 柏	梔 子	柴 胡	用法・用量
診療医典	注1	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	
処方解説		1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	
基礎と診察	注2	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	*1
処方分量集	注3	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	*2
漢方処方集		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	2	*3

*1 散として用う。

*2 左を末とし1日6、3回に分服す。または常煎法

*3 散として用う。

〔注1〕 小児の腺病体質の改善薬、肺門リンパ腺腫、頸部リンパ腫、慢性扁桃炎、咽喉炎、アデノイド、皮膚病、微熱、麻疹後の不調和、いわゆる疳症、肋膜炎、神経症などに応用される。

〔注2〕 腺病質の子供で頸部のリンパ腺や扁桃腺やアデノイドの腫れ易い虚弱な体質の改善に使う。疳の強い子供で神経質で不眠、夜泣き、偏食する子供に連用させるとよい。適応症は腺病質、肺門リンパ腺炎、アデノイド、扁桃腺肥大症、るいれき、皮膚病。

〔注3〕 腺病質であるいは炎症のあるものの、肺門リンパ腺炎、アデノイド、扁桃腺肥大症、るいれき、皮膚病。

処方番号：73

処方名：柴朴湯（さいぼくとう）

処方構成：

柴胡 4-7、半夏 5-6、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、黄芩 3、大棗 2-3、人參 2-3、甘草 2、茯苓 5、厚朴 3、蘇葉 2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度で、気分がふさいで、咽喉、食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気などを伴うものの次の諸症

効能・効果：

小児ぜんそく、気管支ぜんそく、気管支炎、せき、不安神経症、虚弱体質

原典：本朝経験方

出典：

解説：

小柴胡合半夏厚朴湯

『傷寒論』の方後に掲げている加減七法の一。

73.柴朴湯

参考文献名		柴胡	半夏	生姜	黄芩	大棗	人参	甘草	厚朴	紫蘇葉	茯苓
診療医典	注1	7	5	4	3	3	3	2	3	2	4
処方解説	注2	7	6~8	4	3	3	3	2	3	2	5
処方分量集		7	5	4	3	3	3	2	3	2	5
漢方処方	注3	7	6	2	3	3	3	2	3	3*	5
日常診療の漢方		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

* 紫蘇葉の代り蘇子10を用いてよい

〔注1〕 胸脇苦満，上腹部の膨満，抵抗があってもともに軽微のものを目標にする。
 一般に患者の多くはやせ型で胃腸があまり丈夫でないものが多い。心臓神経症，呼吸困難症などに応用する。

百日咳の発作をおそれる神経質な小児。精神不安と食欲の減退の傾向があるもの。
 百日咳の小児に用いる。ぜん息性発作などによる呼吸困難。

〔注2〕 神経衰弱，ノイローゼ，発作が起きないかと気にし過ぎる気管支ぜんそくなどに用いる。

〔注3〕 感冒でこじれた咳や気管支ぜんそくの発作予防に用いる。

処方番号：74

処方名：柴苓湯（さいれいとう）

処方構成：

柴胡 4-7、半夏 4-5、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、黄芩 3、大棗 2-3、人參 2-3、甘草 2、
沢瀉 5-6、猪苓 3-4.5、茯苓 3-4.5、白朮 3-4.5（蒼朮も可）、桂枝 2-3

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度で、のどが渇いて尿量が少なく、ときにはきけ、食欲不振、むくみなどを伴うものの次の諸症

効能・効果：

水様性下痢、急性胃腸炎、暑気あたり、むくみ

原典：世医得効方

出典：万病回春

解説：

本方は小柴胡湯と五苓散の合方剤である。

74.柴苓湯

参考文献名	柴胡	半夏	生姜	黄芩	大棗	人参	甘草	沢瀉	猪苓	茯苓	朮	桂枝	
処方分量集	5	4	4 (乾1)	2.5	2.5	2.5	2	4	2.5	2.5	2.5	2	
診療医典	7	5	4	3	3	3	2	5	3	3	3	2	
診療の実際	注1	7	5	4	3	3	3	2	5	3	3 (白)	2	
応用の実際	注2	6	5	4	3	3	3	2	5	3	3 (白)	4.5 (白)	2
診療三十年		7	5	4	3	3	3	2	6	4.5	4.5	4.5	3
漢方あれこれ	注3	7	5	4	3	3	3	2	5	3	3	3	2
現代漢方入門(毎日)		4	4	乾1	2.5	2.5	2.5	2.5	4	3	4	3 (白)	2.5
明解処方		記載なし											

【注1】 小柴胡湯の証で口渴，尿利減少の者に用いる。

【注2】 小柴胡湯と五苓散の合方で両証を兼ねるものに用いる。(例)慢性腎炎で時々嘔きけがおこり，肩がこって時々腰背部が痛む患者で腹部は全体の緊張がややゆるく右の季肋下に抵抗がある。また，右の腹直筋は肋骨の直下から臍下まで攣急し臍の右傍に圧痛をみとめ，左の腹直筋が臍の左側で攣急していた。この患者には五苓散を用いたと思ったが，胸脇苦満があるので小柴胡湯と五苓散の合方である柴苓湯を投与したところ4週間後全身の調子がよくなった。

【注3】 肝硬変でおなかがはった感じで少し腹水があり，肝臓部に抵抗があって口がかわくときによくきく。

処方番号：75 処方名：左突膏（さとつこう）

処方構成：

松脂 800、黄口ウ 220、豚脂 58、ゴマ油 1,000

用法・用量：

外用

しばり：

（しばりなし）

効能・効果：

化膿性のはれもの

原典：春林軒膏方

出典：

解説：

『春林軒膏方』（華岡青洲）を原典とする外用薬である。「ゴマ油を煮て水分を去り、黄蠟・豚脂を熔かしこみ、最後に「瀝青」を入れ溶融し、布で漉し、再度煮て粘度を整える」と記述されている。

「瀝青」とは、『春林軒膏方』では「チャン」と発音し、松脂と油から作るように指示している。そして作れない人は「オランダのチャン」を買って使うように書いてある。後者は瀝青炭のピッチ（タール）をさして現在では使わず、前者の松脂が使われている。

75.左突膏

参考文献名		瀝青	黄蠟	豚脂	ゴマ油
応用の実際	注1	800	220	58	1000
診療医典		800	220	58	1000

〔注1〕 癰瘡その他の化膿性腫物の潰爛（くずれる）したものに貼る。腐肉がとれて、新しい肉芽が生じやすくなる。

処方番号：76

処方名：三黄瀉心湯（さんおうしゃしんとう）

処方構成：

大黄 1-2、黄芩 1-2、黄連 1-1.5

用法・用量：

湯：（振り出しの場合 1/3 量を用いる）

しばり：

体力充実して、のぼせ気味で顔面紅潮し、精神不安、みぞおちのつかえ、便秘傾向などのあるものの次の諸症

効能・効果：

高血圧の随伴症状（のぼせ、肩こり、耳なり、頭重、不眠、不安）、鼻血、痔出血、便秘、更年期障害、血の道症

原典：金匱要略

出典：中蔵経方

解説：

大黄、黄芩、黄連の黄の字を有する3つの薬からなり、心熱をさますので三黄瀉心湯といわれる。単に瀉心湯ともいう。水 120ml をもって 40ml に煮詰め頓服。

振り出し剤として用いる場合は、熱湯 10ml を加え、3 分間煮沸し、滓を去って頓服する。吐血、衄血、咯血、その他の出血症（痔出血、血尿、皮下出血等）のあるときは振り出しにして、冷えてから服用する。出血が長引いて、貧血が著しいもの、脈の微弱なものには用いてはならない。

76.三黄瀉心湯

参考文献名	大黄	黄芩	黄连	用法・用量
処方分量集	1	1	1	泡剤*1
診療の実際	1	1	1	ふり出し剤*1
診療医典 注1	1	1	1	ふり出し剤*1
症候別治療	1	1	1	ふり出し剤*1
処方解説 注2	2	1	1	頓服 ふり出し*1
後世要方解説	-	-	-	
漢方百話	()	()	()	
応用の実際	1	1	1	振り出し剤
明解処方	1	1	1	振り出し剤
漢方処方集	2	1	1	頓服、便法3薬各3、常煎法
新選類聚方	2	1	1	頓服
漢方入門講座	2	1	1	頓服、長服ときは3薬各3、3回分服
漢方医学	1	1	1	振り出し剤*1
精撰百八方 注3	2~5	4	4	ふり出しとして用いる場合には3味各1を100ccの湯にて3分間振り出し、1回に頓服する
古方要方解説 注4	4.8	2.4	2.4	頓服
成人病の漢方療法	1	1	1	振り出し薬、煎じる場合には左記の3倍量を1日分として用いる

*1 剤とする場合には、これに熱湯100mlを加え3分間煮沸し、かすを去って頓服する、と記載。

〔注1〕 のぼせ、顔面潮紅、気分の不安定などがあって、便秘し、脈に力のあるものを目標とする。……脳充血、脳出血、喀血、吐血、衄血、子宮出血、痔出血などに用いられ、また切創その他の出血で、驚きと不安の状があるときに、頓服として用いて、気分を落ち着け、止血の効を發揮する。ただし出血が長びいて貧血が著しいもの、脈の微弱なものには用いないがよい。以上の他に高血圧症、神経症、不眠、胃潰瘍、胃炎、血の道症、更年期障害、皮膚病、眼病、てんかん(癲癇)、精神病、火傷などにも用いられる。

〔注2〕 本方の目標は、実証に属し、いわゆるのぼせ気味で、気分がいらいらして落ちつかず、脈に力があって、便秘の傾向があり、驚きやすく、不安状を呈するものである。腹は心下部に痞えがあり、表面は柔軟で底に力がある。脈は浮で大きく、数のことが多い。本方証の出血は鮮赤色で瘀血による暗紫色でないのが特徴である。本方証には心下部に痞塞感があり、また充血性炎症性の上衝や精神の不安がある。

〔注3〕 上衝、充血の状があり、心下が痞えた感じだが、按じてみると軟かいもので、吐血、衄血等の血証があるものに広く用いられる。

〔注4〕 故に方極にいわく「心気不定、心下痞シ、之ヲ按ズルニ濡ナル者ヲ治ス」と。又、医聖方格にいわく「吐血、衄血、諸血症ニシテ、其ノ人心下痞鞭シ、鬱鬱トシテ熱煩シ、大便鞭ク、劇シキ者ハ舌黄ニシテ、面目赤シ。瀉心湯之ヲ主ドル」と。此の二説、能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：76A

処方名：三黄散（さんおうさん）

処方構成：

大黄 1-2、黄芩 1-2、黄连 1-1.5

用法・用量：

散：1回 0.8g 1日3回

しばり：

体力充実して、のぼせ気味で顔面紅潮し、精神不安、みぞおちのつかえ、便秘傾向などのあるものの次の諸症

効能・効果：

高血圧の随伴症状（のぼせ、肩こり、耳なり、頭重、不眠、不安）、鼻血、痔出血、便秘、更年期障害、血の道症

原典：金匱要略

出典：中蔵経方

解説：

三黄瀉心湯の散剤である。